

団長の心のものさし

思いは貫け！
意識は変えろ！
頑固さと柔軟さ

人間嫌いで合唱できるの？

合唱に限らずだが、音楽をやっている人には意外と“人間嫌い”が多い(笑)。不思議だ…？訳が分からない。まあ、嫌いとはまではいかずとも、苦手な相手が多いようだ。もう少し突っ込んだ言い方をすれば、合唱団で活動するうちに苦手ないしは嫌いになることがあるようだ。これは残念だが、なるほどそうなのかもしれない。理解は出来る。

合唱団で長く活動していると、他の社会の中での人間関係よりも濃い関係を要求されるからだろう。普通なら、適当にやり過ごせば何とかなっていく関係が、そうはいかないのである。うたおにの場合、それは顕著だ。週2回の定期練習、それ以外の本番等の活動を加えれば、一年365日の内、3日に一度は顔を合っている計算になる。忙しい恋人同士なら絶対に成立しないデートの確立だ(笑)。つまり、世の恋人同士よりもデートを繰り返しているということになる。なんと怪しいグループだ。

これだけの時間、同じ空間を共有していると周囲のメンバーは風景と化し、関心すら示さなくなるのだろうか？深い付き合いを敬遠するようになるのだろうか？とにかくややこ

しいことは嫌なのだろう。「どうして好きなことやっているのに気の合わない人と仲良くしなきゃいけないの？」と、こんな具合だ。これ実際に聞いた話。一見、そりゃまあ…と思える話だ。しかしだ！「あなたの嫌いなあの人も合唱を好きでやっているんだけど」と、それがわからないのだろうか？なんと独りよがりな感覚だろう。自分さえよければ他人のことなど知らない。

アンサンブルは周囲に関心を持つこと

ある程度以上の人生を経験してきたメンバーが集まる一般のグループ。自分の主義主張を持って生きて来たのだろう。そのことをどうのこうの言うつもりはない。だが、せっかくアンサンブル活動を継続している合唱団で、それはないだろうと…残念でならない。

周囲に関心を持ってこそアンサンブルは完成する。無関心ではアンサンブルとは言えないのではないか。仲間への信頼 共感 時と場合によってはトキメキや憧れetc.周りを感ぜなければ合唱など出来ない。でもや

り続ける。だから思いが伝わり難くなる。「そこまで考えなくても…」という声が聞こえそう。そうかもしれない。だが、真のアンサンブルを目指すのであれば、それは絶対条件だ。

政情不安、民族の危機や生命の危険に直面しているような国々では、仲間に入める思いの深さが、私たちとは比べ物にならない。やはり平和、豊かさの“悪しき恩賞”なのか。

好き嫌いに振り回されない意識を持つことは、音楽はもちろん、人間の社会生活のあらゆる場面で有効だと思う。あなたが意識を変えるだけで周囲は必ず変わる。あなたが変えなければ、誰も変わらない。

仲間を愛せなければダメ

僕は長い間、合唱活動を続けて来ている。最近よく感じることがある。仲間を愛せないのに歌えるものなのか…と。愛すべき仲間だと思いつつ、ずっとそうしてきた。思い続けて来た。逆にこちらの思いが伝わらない、そう、片思いのような胸が締め付けられる苦しさに見舞われるのだ。

思いは一方的ではいけない。こちらの伝え方が悪いのかもしれない。でもキャッチボールの出来ない思いは、それこそ重苦しく押し掛かるだけだ。自分のことだけではない。メンバー間のトラブル…目には見えなくても聞こえてくる、そんな現状に触れると、もっと大らかに優しく接する気持ちを持つべきだと、声を大にして言いたい。

些細なことで意地を貫き通す意味などないではないか。気に召さなくても、ちょっと遊んでみたらいいじゃない！自分が“否”としていたもの、ちょっと規制緩和して(笑)まわり道を楽しんでみればどう？人生に“寄り道”、“みちくさ”は結構大事だと思うな。きっと新しい発見があるから。

そういう意識を変える人が増えてくると、俄然、空気が変わる。強い追い風が吹くのだ。そしてその風に乗って、次のステップへ踏み出せるのだ。“はじめの一歩”がなければ、何も動かない。

うたおにの5月27日(木)の様子

練習内容

Hear my prayer, O Lord
SANCTUS
Agnus Dei
ねがい

名曲は歌い甲斐がある。そして“落し穴”も。「気分が歌わない！」本当に痛感する。冷静に、客観的に

取り組んでこそ、作品の真意を伝えることが出来るのだと。今一度、楽譜をよく見直してもらいたい。もう歌えるから…は無しだ。ここ最近、進入団員が増えている。きょうは駒田絵美さんが見学、そして入団していただいた。三雲中学校で合唱部に入っておられたとか。練習会場の近所の会社にお勤め。よろしくです。

個人の責任って何？

“個人の責任”という言葉をよく耳にする。大人のグループであれば当然だろう。うたおには、個人それぞれの都合を考慮し、可能な限りその自由を拘束しないスタイルを貫いている。しかし、どんな場合でもそうだが、一つの方法を使い続けていると、そのその本質を正しく理解しない限り、誤解・曲解してしまう傾向が出てくる。

.....

合唱団はアンサンブルグループである。したがって練習日は基本的に指揮者によるアンサンブル練習となる。いきなり合わせからスタートする。全体で簡易な音取りのようなことも行うが、定期練習では、パートに分かれての音取り練習は皆無に等しい。発声練習などもしない。たくさんの作品に取り組むことで、合唱に必要な要素を習得する、いわゆる“問題解決法”的な練習だと考えている。この方法ならば、単純な練習にならず、しかもたくさんの作品と出会うことが出来るわけだ。定期練習はあくまでも“合唱団が高まるための練習”という位置づけなのだ。

異なるスタートライン

一般の合唱団の場合、学生のサークルとは異なり、メンバーのスタートラインが必ずしも同じではない。また、在団年数も大きく差が出る。同じメニューをこなすことには無理が生じる。実は、この無理が生じることに対する誤解・曲解が存在している。

たとえば、合唱経験のない新入団が入ったことによって、発声練習、音取り等、すべてのことをそのメンバーに合わせてスタートラインを遅らせることは、合唱団全体の加速にブレーキをかけることになる。それは本末転倒だ。しかし、だからと言ってそのまま放置しておける問題では決してない。その新メンバーの実力の向上は、そのまま合唱団の力となるからだ。周囲のメンバー、とりわ



30日、男声のパート練習が行われた。新入団員が増えたためだ。新しいメンバーはうたおにの歴史を塗り替えるほどの秘めた力を持っている

け然るべき役割を受け持つスタッフ、肩書きに関係なくキャリアのあるメンバーは、そのことに“心”をもって取り組んで欲しいと願っている。

慣れた活動を変える

メンバーそれぞれに、合唱団の活動に一つのスタイルを育ててきたと思う。それが周囲の環境が変わるとそのスタイルを貫き通せなくなる。それが社会だ。合唱団は社会そのものなのだ。さまざまな人々が集う。そこに歴然とした差はあっても、差を蔑視してはいけない。差を上手く生かしてこそ平等になり、社会が有効に機能していると言えるのだ。僕は思う。スタイルそのものには“真実”など存在しない。真実は、様々な形に姿を変えて生き続けるものだと思う。

“新しいスタイルを楽しむ”・・・その姿勢は、音楽に向き合う姿勢に似ていると思う。新しい作品と出会うトキメキ、期待。そして何度となく歌う作品に対しては、新しい魅力を見つけ出す冒険者のような眼を持つことだ。合唱団の活動も然り。パターン化した活動ではなく、こんなことやってみよう！とか、久しぶりにあれやろう！とか、刺激的な活動をし

たいものだ。

“個人の責任”はそのまま “グループの責任”だ

“個人の責任”だからと言って、その人に任せっ放しでいいのだろうか？他人の責任にしてしまっ、共に生きる人としての“思いやり”を捨ててしまっはいないだろうか？全体に迷惑をかけないように個人の努力を惜しまず喰らい付いていく・・・それは大事なことだ。しかし、当たり前だが、グループや社会は一人で成り立っているわけではない。“個人の責任”はそのまま “グループの責任”に跳ね返ってくるのである。

個人とグループは、お互いが影響しあう関係である。となれば、それが良い影響を与え合う関係でありたいものだ。どちらが大事かという問題ではない。たしかに個人あつてのグループであることは事実だが、必ずしも個人が絶対的権利を有しているわけではない。そうなればグループは育たない。現にグループが個人を高めているケースは多く存在している。

個人に責任を押し付け、個人の権利を主張する・・・これではあまりにも身勝手だと思うのだが・・・